

全ての人の自由と幸せのために

仙台市立五橋中学校

3年 島崎 友貴乃

私が横田めぐみさんを知ったのは、小学四年生の頃だった。校内の掲示板に貼られたポスターに写った、着物姿の愛らしい少女の姿が印象に残り、母に尋ねた記憶がある。「外国に連れ去られ、今も帰れない。」そんな話を聞いたように思う。しかし、その少女と家族を襲った悲劇と、そこに記された「必ず取り戻す」という言葉に込められた思いを、当時の私は想像することすらできなかった。

今回、アニメ「めぐみ」を鑑賞し、めぐみさんと家族の身に起きた「拉致」という信じ難い事件のいきさつを知り、大きな衝撃を受けた。「拉致」、それは人間の尊厳を踏みにじる犯罪行為であり、同じ人間同士の間決して起こってはならないことだ。他人の自由と幸せを奪って、何が成し遂げられるというのか。そのようなことをした人間たちに罪の意識はないのだろうか。自分で選ぶはずの未来、夢、家族や友人との絆、その全てを断ち切られ、見知らぬ土地へ連れ去られためぐみさんは何を思い、生きてきたのか。そして残された家族は、長い年月をどのような思いで過ごしてきたのだろうか。大切な家族を奪われた怒りと悲しみを、「必ず取り戻す」という強い意思に変えて、これまで闘ってきたであろう彼らの胸の内を思うと、何もできない自分に無力感が湧いてくる。しかし、その感情に流され、この問題から目を背けてはならない。私にできるのは、拉致問題について深く理解し、現在も続いている身近な問題として関心を持ち続けること、そして、想像力を持ち、被害者とその家族の思いに心を寄せることだ。小さな思いではあるが、それが国民の思いとして集まれば、問題解決へとつながる力にもなり得るはずだ。

アニメの中で、めぐみさんの母である早紀江さんが、街頭で人々に呼びかけている場面が印象に残っている。「私たちは北朝鮮に住む一般市民の人たちを憎んだり恨んだりしているわけではありません。」深い怒りと悲しみの中にあってもこのような言葉が言えるのは、罪もなく苦しめられることの理不尽さを、誰よりも知っているからだろう。早紀江さんの言葉を聞き、拉致を指令した人と北朝鮮の民衆とは別であり、国としての北朝鮮を憎むべきではないと感じた。また、拉致被害者の蓮池薫さんの著書には、厳しい管理体制や食料、経済難に苦しむ北朝鮮の人々の姿が綴られていた。そのような、私たちとは異なる社会環境で生きる人々へも想像力を広げ、対立ではなく、どこまでも対話によって理解し合えればと思うのは、理想論でしかないのだろうか。

国際社会において、全ての人権が尊重されるために、民族を越えて互いに歩みよる努力をし、真の友好関係を築くこと。そして、その願いの先には、必ず拉致問題の解決があると私は信じたい。